

## 片山美穂

Miho Katayama ●女優

### 戦争孤児を 描いた ひとり芝居に 挑む

舞台で、ひとりの老女が雛人形を飾っている。彼女は亡き母の思い出を語りはじめる。戦時中、学童疎開先に面会に来た母に「明日はいっしょに東京に帰って、雛祭りを祝おう」と言われ大喜びするが、朝、目覚めたとき母の姿はなく、そのまま音信不通に。裏切られたと母を憎むが、そんなある日、母から雛人形と手紙が届く……。

母の深い愛と平和を願う心がせつせつと伝わる「雛」の舞台で、片山美穂さんは白髪の老女から一転、30代の母親にと、迫真のひとり芝居を見せる。戦争孤児をテーマに作品を書きつづける西村滋さんの短編で、片山さんが立ち上げた「チーム・クレセント」の記念すべき第1回公演だ。自身のライフワークと語るほど、彼女の心をとらえたものは何だったのだろうか。

これまでの価値観を変えた一冊の本との出会い  
片山さんは幼いころから正義感が強く、報道カメラマンをめざして大阪芸術大学に入学したが、1年生の夏に親衛隊を受ける。作品そのものの力強さ、そして人間の心を歌と踊りと言葉で、

これほど深く壮大に表現できるものなのかと、感動に胸を震わせた。悩んだ末に大学をやめ、勤当同然で東京に出てきた。苦勞しながらも、女優をめざして健気に努力する姿は輝いていたのだろう。23歳のとき、バイト先で顔なじみになったテレビ関係者からの強い後押しがあり、時代劇に初出演するこゝとに。以来、女優としてキャリアを積んできた。

ところが、「けっこう前向きで、何があっても乗り越えていく派」だったのに（笑）、養母の介護中に初めて精神的に落ち込んでしまった。心身のバランスを整えようと、昔習っていたヨガを再開。その教室に置いてあったのが西村さんの「お菓子放浪記」（全3巻）だった。

それまでの価値観を一変させる出会いだったという。この本は、戦中戦後の日本を舞台に、孤児のシゲルが、お菓子と出会って生きる希望を見いだしていく名作で、昨年「エクレールお菓子放浪記」として映画化もされ話題になった。

「薦められて読んだら、もう涙が止まらなくなっちゃって。感動のあまり、すぐ先生にお手紙を書いたんです。

